

主旨のはっきりした意見文を書くことの指導

—— 事実をふまえて、意見文を述べる場合 ——

岩船郡朝日村立高南小学校教諭 前 田 喜 春

I 主題設定の理由

学級生活を改善するための意見を発表したり、学級日誌などに一日の反省を書いたりする機会が多くなっているが、事実をふまえない抽象的意見であつたり、考えに一貫性がなかつたり、意見が飛躍したりして、論の展開は不じゅうぶんである。そこで、主旨のはっきりした考えを述べる力を高めようと考えた。

II 研究目標

学級生活の共通経験の中から、問題を発見し、それをどのように改善したならば、よりよい生活ができるかを、主旨のはっきりした意見文に書き、相手にわかつてもらうようにするにはどうすればよいか、その指導過程を明らかにしたい。

III 研究仮説

主旨のはっきりした意見文を書くには、次の点から指導したらよいと考える。

- (1) 述べようとする主旨が、よくわかるように焦点化した文題で書かせたら、一貫性のある文章を書くことができるであろう。
- (2) 記述前に、問題になる事実をよくふまえ、解決の方法まで話し合わせたならば、書こうとする内容が明確になり、意見構成を助長することになる。
- (3) 参考文を学習することによって、「問題事実、意見、改善策」というふうに論の展開の原型をとらえさせたら、説得力のある意見文を書くことができよう。

IV 研究計画と指導の実際

1. 実態調査

研究対象 担任5年 47名の児童。学級生活の共通経験の中から、関心のある問題を選び、それをよりよくするために、話し合うことはあつても、意見文を書くことについては、まとまつた指導をしていない。たまたま、6月に掃除のしかたが悪いということが問題になつたのを契機に、意

見文を書かせ、実態調査をすることにした。その実態をまとめると、次のようである。

- ① 文題 → ア・そうじについて(18人)。イ・そうじのしかた(14人)。ウ・じょうずなそうじ(6人)。エ・その他(9人)
- ② 主旨の明確さ → ア・主旨がぼけている(31人)。イ・だいたいよい(16人)。
- ③ 事実と意見の関係 → ア・事実だけしか書いていない(9人)。イ・自分の意見だけしか書いていない(3人)。ウ・事実を抽象的にだし、意見を部分的にだしている(28人)。エ・事実をしつかりふまえて、自分の意見を述べようとしている(5人)。オ・改善のための対策も一応だしている(2人)

実態調査から、次のことがいえるようである。

ア・文題をみると、大部分が「そうじについて」とか「そうじのしかた」となっており、自分の班の掃除の実状報告なのか、実状についての意見なのか、はつきりしない。そこで、「そうじをはやくじょうずにするにはどうすればよいか」など、もつと書こうとする主旨を焦点づける意味で、文題を吟味する必要がある。

イ・問題になっている事実や訴えようとする意見が貧弱である。書く意識を高めたり、内容を豊かにさせる上でも、記述前に話し合いをとりあげたらいいたろう。

ウ・意見文の書き方がわかっていない。まず、問題になる事実をふまえた意見でありたい。つぎに生活改善のための解決の方法をうちだし、説得に迫力をもたせたい。これは、参考文などで理解させなければならないだろう。これらをふまえて、つぎのように学習指導目標と指導過程をおさえた。

2. 学習指導計画

(1) 学習指導目標

- 生活を改善するための考えを、人にわかるように文章に書くことによつて、筋道をたてて考える態度や能力を養い、生活をよりよく高めるようにする。

(2) 学習指導過程

- | | | |
|-----|------------------------------------|--------------------|
| 第一次 | 参考文で意見文の書き方を理解する。 | 計 4 時間
(1 時間) |
| 第二次 | 学級生活の共通経験の中から、改善すべき問題を話し合う。 | (1 ") |
| 第三次 | 何を、どう改善したらよいか、主旨がよくわかるように構想をたてて書く。 | (1.5 ") |
| 第四次 | 学習したことをおさえて表現しているか。ふりかえり、推考する。 | (0.5 ") |

3. 指導の実際

(1) 参考文による学習

実態調査で書いたすぐれた作文を一部手直しし、それを参考文として学習する。

「どうしたら、そうじをきれいに、はやくすることができるだろうか。」

①私の班の男の人は、そうじになると、よく放課後にする遊びの相談をはじめる。そして、話にむちゅうになると、はくほうきの手をやすめてしまう。

「はよ せつしゃ。」

と言うと、こんどは、はく間を大きくしてはく。これでは、ごみがあちこちに残って、二度のてまをかけなければならない。

「〇〇君。ここにゴミ あるつせえ。」

と言うと

「自分だってはけば ゴミ残すくせに。」

など ぶつぶつ言い始める。しまいには、

「おれ、便所、行ってくる。」

なんて、ほうきを投げて、教室をでてしまう。便所へ行っても、はやくくるとよいのに、水を飲んだりして、ろうかをだらだら歩いてくる。だから、教室へもどつてくるころには ほとんどそうじもできそうになっている。

②みんなで、4月に「そうじをきれいにしよう」ときめたのに、もう忘れているのではないだろうか。または 知っていてもなまけて、こんな態度をとるのだろうか。こんなことでは、早くりっぱにできるはずがない。男の人も協力して、はやくしようずにそうじをしてもらいたい。私は、そうじのめあてについて、もっと具体的に考えてみる必要があると思う。

③それでは、どうしたらよいか、私は、自分の班のようすを考えて、次のことを班のみんなに希望する。

- 便所へは学級終会がすんだら、すぐに行ってくる。途中でかつてに行かない。
- だまってそうじをする。仕事以外の話は決してしない。話は声をひくめてやる。
- 仕事の分担をそうじの前に決めておく。決めたことは、不平をいわずにきちんとする。
- 反省会の司会者は、順々に全員がうけもつようにする。反省会もその項目を決めておいてやれば、能率的にできると思う。

この参考文で意見文の書き方を学習したが、次のことを強調した。まず、参考文のように文題を吟味することによって、訴えようとする主旨が明確になることをおさえた。また、参考文では、何を問題事実①としてとらえているか、それをどう考え②ているか、その解決の方法③をどう提案しているかさぐつた。ことに、問題事実①を述べる際に会話がよく挿入されたし、解決の方法③を箇条書きにしたやり方が、文章を書く際にずいぶん参考にされた。

(2) 記述前の話し合い —— ビンポンをめぐる問題 ——

本校には、中学年、5年、6年に各1台ずつビンポン台が、元柔道室に備えつけてある。2学期にはいると、ビンポン熱が起こりだし、学級の一部の男子の間にも広まった。ところが、問題が頻出し、学級会の議題にのぼることになった。

① 問題になる事実

- 台をとるために、ろうかを走る。○ そうじをそそうにする。○ 女子はできないでいる。など。

② 事実をふまえた意見

- 同じ友だちなのに、自分だけという考えは困る など。

③ 解決の方法

○ わりあての表にしたがつてする。○ ラケットや球を学級で用意する など。

相手を説得するための基本的要素をおさえて 話し合っている間に、書こうとする事ががらがいまいにまとまり、順序だてられたと考えられる。

(?) 意見文を書く

ビンボンの問題をまとめた意見文に書き、相手に説得させるには、どういふ述べ方をしたらよいかということで学習にはいる。

① まず、目的を確かめる。文題をしつかりおさえる。

② 自分は何を問題点としてとりあげるか、それをどう解決しようとするか—— どう訴えたら相手がわかってくれるか考えさせる。

③ 構想メモ用紙に (問題事実)→(意見・理由)→(解決の方法)を項目ごとに書きださせる。

「構想メモ」 I 女兒の例(国語成績 3の上・作文4の下)

(主論文) 男の一部の人ばかりビンボンを楽しんでいるけど、ほかの人のことも考えて、わりあて表などづくり、みんなで楽しむようにしよう。

◇ 楽しくない困った事実

・ 毎日男ばかりしている。 ・ ビンボンのラケットをかしてくれない。

◇ この事実をどう考えるか、なぜそう考えるか

・ みんなのビンボン台なのだから、みんなで使うべきだ。 ・ 自分のことばかり考えないで、みんなのことも考えるべきだ。

◎ どのようにしたらよいか、その解決の方法

・ 学級にも、球やラケットをおく。 ・ ある人は、かしてやるようにする。 ・ 男と女がわりあてて使う。 ・ 男でも女でもへたな人がいたら、友だちどうし教えてやる。

④ 構想メモがきまつたら、それを参考にしながら、主旨がはっきりするように筋道だてて書き進める。

「意見文の原文」 I 女兒の例

「どうしたら、みんなが ビンボンを楽しむことができるだろうか」

わたしたちの組では、ビンボンがさかんである。だけど、男の人たちしかしていない。

この間、男の人たちがやっていたとき、おもしろそうだったので、わたしたちが、「いれて」といつたら、いやいや入れてくれたけど、ちょっとへまをすると、男の人は、「なんだ。いれれなんていって、いれてやつたのに、せねんがな。」といつて、人をばかにした。わたしたちはやめてしまった。

また、こんなこともあった。ビンボンのラケットをもっている人に、かりに行くと、「ラケットに あかつく」といつたり、「ほくのだから、人には 貸さね」といつたりして、貸してくれない。『がめつの』というと、「じぶんだつて、人なんかいて、喜んでしているくせに」という。だから、女の人はいなくなつた。男の人の一部の人しか ビンボンをしていない。

やっている人は楽しいかもしれないけど、やらない人はちよつとも楽しくない。学校のビンボン台なのだから、みんな楽しくなかよく使うようにしてもらいたい。自分たちだけのものではないのだから、ひとりじめするのはおかしい。それに、へまをするというのは、それだけビンボンをしていないしょうこかもしれない。へたな人がいたら、友だちとしてなかよく教えたらいい。自分ばかりしか考えない人がいる学級では、けつして楽しくならないと思う。

それでは、どうしたらよいか 解決の方法を考えてみた。

1. 学校のラケットが 6年生などにかりられたら、もっている人が気持ちよく貸してやる。また、学級に球とラケットを用意しておいたらよい。学級費で買う。
2. 男の人たちのする時間、女の人たちのする時間をきめて、ビンボンをさせる。
3. ビンボンにまだなれていない人は、ゆかの上で、いつでも自由にビンボンの練習をしていて、人とやれるほどになつたら、ビンボン台の上でやる。
4. じょうずな人はしんせつに教えてやる。

こういうふうにすれば、わたしたち学級は 楽しくビンボンをすることができるようになると思う。中学年や上の6年生たちも、まねして 5年生みたいにやればいいが。

(※ 紙面の都合で、会話の部分を改行していない)

I 女兒の意見文は 比較的よく書いた例であるが、学級全体のものをまとめると、次のような結果になつた。

① 主旨の明確さ

ア. 主旨がぼけている(5人)。イ. だいたいよい(42人)。

② 事実と意見、対策の関係

ア. 事実だけしか書いていない(0人)。イ. 自分の意見だけしか書いていない(0人)。ウ. 事実を書き 意見を述べている(2人)。エ. 対策しか述べていない(1人)。オ. 事実、意見、対策を述べているが、混乱している(2人)。カ. 事実をふまえて意見を述べ、対策もだしている(39人)。キ. 事実・意見、事実・意見、そして、対策をだしている。(3人)

「みんなが楽しくビンボンをすることができるようにするにはどうするか」という観点から一貫して意見を述べているせいもあり、主旨の明確な文章が多かつたし、大部分の子どもが対策をだしていた。事実と意見・対策の関係についても、みんなが楽しくない問題事実を各自とらえ、それをどう考えるか、なぜそう考えるかなど、意見を述べ、それではどうしたらよいか その解決の方法を提案しており、構想メモとだいたい一致していた。ウ、エ、オは 成績の下位の子どもに多かつた。なお、キのように、事実・意見、事実・意見、そして対策と述べているが、これも認めること

にしたい。

(4) 文章の推考

訴えようとする主旨を、相手によりよく説得してもらおうとするために、文章構成をすつきりさせたり、対策を書き加えたりしていた。

I 女兒の推考例 (意思文の原文をもとに推考したもの)

(解決の方法)の(2) **付加** たとえば、月・水・金の朝と15分休みは男、昼休みと放課後は女。火・木・土は その逆にする。(3) **付加** 男のわりあてでない時、中の運動場のゆかの上で、じょうずな男の人が女の人に教えてほしい。最後の1行 **抹消** 「中学年・」

V 研究の考察と反省

(1) 実際に、ピンポンのことが問題になっており、それを改善しようとする寮団気がなければ書く意欲がわかない。また、問題になっている事実をしつかりとらえ、それをどう改善させるかという対策をもたなければ、相手を説得させるような意見文は生まれない。それは単なる感想文となろう。ところで、「ピンポンについて」とか「ピンポンのしかた」などの漠とした文題でなく、問題解決の方法まで含めた主旨に、文題を焦点づけてみると、主旨のはっきりした意見文が書けるであろう。

(2) 記述前に話し合いを導入したことによって、意見文を書こうとする必要感をそいでしまったようである。しかし、初めての意見文指導でもあり、書く内容を豊かにしたり、文章構成をしつかりとらえたり……つまり、書き方を理解するには、効果があつたと考える。今後、意見文を述べる上で、価値ある問題を発見し、積極的に学習を転移することによって、さらに身につけさせようと思う。その際、話し合いの導入については、よく検討すべきであろう。

(3) 相手を説得させようとする意見文であることから、構想のたて方がだいじである。問題事実・意見・対策の組み立てによって文章を書かせたが、これを明確に区別することに多少抵抗を感じている子がいた。だから、弾力性のある文章構成を認めていい。たとえば、意見・事実・対策や事実・意見・事実・意見・対策など。なお、発達段階から考えて、どれが児童にとって述べやすいかは、残された課題である。

(4) 意見文は6年生でなければ書けないという考えもある。しかし、はっきりした問題事実に対する意見をしっかりとち、さらに参考文を導入したりして、意見文の書き方を理解させたならば、5年生の児童でも意見文を書くことができると考える。

<参考文献>

倉沢栄吉編著「作文の指導過程Ⅲ」 平井昌夫著「文章表現法」 興水実編「国語科基本的技能」
「作文技能」 学校教育全書「国語教育」など。